

アンドレ・マルローとスペイン市民戦争

店村新次

マルローは二〇世紀の証人である。時代に対する異常な共鳴が本能的に彼を歴史のリズムに調和させる。時代に先行しているように見えるときに特にそうである。(P・ボワデフル)

まえがき

13 アンドレ・マルローとスペイン市民戦争

右のエピグラフ、あるいはそれを更に縮約したようなガエタン・ピコンの「歴史が彼を要求したとき、マルローはつねにそこにいた」という犀利な寸評は、マルローが前半期の主要作品を発表していたころ、フランスを見棄てるように抜け出して、両大戦間期前半のヨーロッパを留守にしていた人だけに、却って深い意味をもつ。前期作品群中『征服者』(一九二八)、『王道』(一九三〇)、『人間の条件』(一九三三)というマルローの秀爽最良の部分をなす小説群は、極東三部作とでも称すべきもので、カンボジアのジャングル奥地を冒険の舞台とする『王道』、イギリス帝国主義に抗して広東政府が決行した第二次香港封鎖を主題とする『征服者』、第一次国共合作による上海革命と蒋介石の共産党弾圧を題材として、日本武士道精神(自死の哲学)にまで触れる『人間の条件』は、マルロー自身の渦中に身を挺しての冒険や行動に伴って生成した作品であり、この間マルローは東洋との結びつきは深くしたが、ヨーロッパの歴史からは一

歩退いた位置にいたのである。この時期のマルローの去就ほど、病めるヨーロッパよりの脱出という当時の流行語を地でいったものは少ない。右の小説のうちの二つまでが、ヨーロッパをあとにして極東に向かう船の甲板上のシーンから始まる、というのがいかにも象徴的である。このようにヨーロッパから離れていたマルローに、それでもなおガエタン・ピコンの「マルローはつねにそこにいた」という言葉が当て嵌まるところに、超高感度の時代感覚アンテナを具えた彼の本性が逆説的に認められる。

マルローは極東から、マルクスズムへの共感を持ちかえった。これが、彼の反ファシズム運動への推進力となり、フランコの反革命に対抗して、スペイン人民戦線政府に肩入れするための論理的支柱となる。(但しマルローは決して入党しなかったし、コミュニストであろうとしたこともない。そして、独ソ不可侵条約締結を機に完全にソ連に背を向けたが、その背離はスペイン戦争中に既に萌していた。)

両大戦間期を通じて多くの知識人たちがコミュニズムに傾斜して行ったが、そのための動機と経路には、三種の異なるものがあつたと考えられる。その第一は型通りの経路で、それぞれの国内における資本主義制度の醸しだす社会的矛盾、労働者階級に加えられる圧迫と搾取という御定まりの階級問題から発する経路。その第二のものは、両大戦間期のヨーロッパに見られた、ファシズムへの警戒からの対抗という動機から発するもの。そして第三の経路は、これらと少しく趣きを異にして、植民地における資本主義列強の搾取、圧服をまのあたりにしての自責と義憤の感情を動機とするものである。たとえばジードの場合がそうであって、彼の『コンゴ紀行』はその記念碑となる。

マルローのコミュニズムへの接近もこの第三の動機に発するもので、まずインドシナで彼が実地に接した祖国フランスの植民地政策の実情、すなわち骨抜きにされ、抑圧されるがままになっているヴェトナム人やカンボジア、ラオ

スの人びとの悲惨さの認識である。先走るが、一九三七年スペインへの援助を求めて渡米したマルローは、新聞記者たちに次のように明言している。

「インドシナでのこの失望は重要な意味を持ちます。資本主義のなかに存する受け容れがたいすべてのものの極度の現われを知るためには、植民地に赴くのでなければなりません。ファシズムを帯する国ならよろしいでしょう。植民地でファシズムに期待すればよいのです。しかしフランスは民主国家です。しかるに植民地に着いたとき、私はそこで一種のファシズムと直面させられたのです。植民地諸民族の酷使とこの上なく罪ぶかい搾取です」

マルローは短いインドシナ滞在在中に若き安南運動ジュヌ・アナムに加わり、「インドシナ」ランドシマ「鎖につながれたインドシナ」ランドシマ・アンシェーネという二種の原地新聞をみずから発刊し、たくさんの社説や記事を書いている。加うるにインドシナ滞在中、マルローは隣中国における排外運動についてのなまなましい情報に接することを得た。列強によって国土を侵蝕され、屈辱のうちに奴隷化されている中国民衆への同情は、そのままヨーロッパ諸国の帝国主義への憎悪となった。こうした体得のなかから、『征服者』『人間の条件』という中国を舞台にした二作が醗酵する。

15 アンドル・マルローとスペイン市民戦争

マルローが『征服者』を書く前に広東政府のなかにどのように入りこんで実地に関与したか、また『人間の条件』の中心的事件である北洋軍閥排除の上海革命に、どのようにコミットして、そこでどのような役割を演じていたのか、その詳細はいまだに確認することができない。マルロー自身がこれらについて殆んど明らかにしようとしなかったからである。本論において述べるスペイン内戦介入の初期の実情がいまだによく解らないのも、これと軌を一にする。能

しかし彼がインドシナでの彼自身の古神像盗掘裁判ののち、日本を訪れ、中国に滞在して、中国の解放運動に参加したことは確かであり、その体験が作品『征服者』、『人間の条件』となって現われたことに疑いを挿む余地はない。

以上のように、マルローは東洋を迂回して、そののちナチスのドイツに（『侮蔑の時代』）、そして内戦のスペインに（『希望』）というふうには、フランスに帰ってくるためには大きな回遊の道を泳いでいたのであった。このようにヨーロッパの歴史との直接の接触からかなり遠ざかっていたマルローについて、それでもなおガエタン・ピコンの批評が正鵠を得ているというのは、一九三三年までヨーロッパが愚昧な暗中模索の国際交渉のなかで混迷しており、一方極東をはじめとする植民地問題こそが遠い未来を左右する伏線として燻っていたのであって、そこに自然に目をこらすことになったマルローこそは、まさに時代先取りの名手として、独自の燭眼を発揮していたことになるのである。そして混迷でぐずついていたヨーロッパにヒトラー台頭という新たな事態が訪れたまさにそのとき、マルローはそこに帰ってきたのであった。彼はあらゆる反ファシズム委員会や会議の先頭にたち、一九三三年ヒトラー政権樹立を見たその年に、はじめてヨーロッパを舞台とし、しかもナチ政権下のドイツ共産党員を主人公とする小説『侮蔑の時代』をひっさげて、ヨーロッパの作家に返り咲いたのである。この作品は特にナチズムの問題やドイツ共産党の実状を抉り出したものとは言えなかったが、このような作品が折もおりヒトラー登場の年に時宣を得て発表されるというところに、むしろこの作家の生得の時代嗅覚の鋭敏さが認められる。そしてこのようにしてアジアのロレンスからスペインのバイロンへと変身したマルローの行動と創作活動は、いよいよ国際飛行隊長としての華ばなしい実戦参加と、不滅の戦争ルポタージュ小説『希望』となって世界の耳目を驚かすことになる。

マルローのスペイン内戦への参加については、およそ三つの面からこれを跡づけることができる。その第一は、共和国政府側への武器、とくに飛行機のフランスでの購入の斡旋、仲介ならびにバイヤーとしての労をとるという努力、そしてなによりも、国際義勇軍航空隊の隊長アンドレ・マルロー大佐としての擾乱への直接参加という、二度までも命を危うくしての実戦活動そのものである。

第二は、フランス国内はもとより、アメリカ・カナダに遊説旅行を試み、スペイン共和派への世界の同情と援助を要請するという、プロパガンディストとしての宣伝活動である。

第三はこれもプロパガンダ的意図が基礎となっているものであるが、彼本来の芸術家としての行動として、戦場から小説『希望』となるものを続々と小出しにフランスへ送っては新聞（ロマン・ロラン、アンドレ・シャンソン、ジャン・カスーなどの協力していた人民戦線派の週刊紙『ヴァンドルデイ』）に発表し、間もなくそれを参加の大壁画小説、スペイン内戦のルポルタージュ文学として完成出版し、ついでにその映画化までもみずから戦場で押しすすめて、フランス本国ならびに世界に、スペイン内戦の実状を訴えたことである。以下本論においては、この三つの面での活動について、順次跡づけてみたいと思う。

天翔ける小説家

「スペイン内戦は一九三六年七月一八日に勃発。その二日後にマルローはすでにスペインにいた。」これがマルローの最初の伝記家、ジャネ・フラネルの伝えたところであり、それにつづく評者たちもこの説を踏襲している。そしてマ

ルローはその場でスペイン政府首脳から、フランスでの飛行機の調達と、国際義勇航空部隊の編成を依頼されて、急遽帰国してそれに取りかかったというのである。マルロー自身も、およそこのように認めている。しかしW・G・ラングロワが「この戦争中のマルローの活動のいくつかの時期については模糊として分らない」といつているように、誰にもこの時期の正確な足どりがつかめないのである。マルローは中国などでの行動についてもそうであったように、自分の行動について韜晦することが多い。しかしこのたびの自晦がそのすぐあとに締結された不干渉条約を慮ったことであつたろうことは、想像にかたくない。知名度の高いマルローが緒戦から行なつたスペイン共和国政府への実効的な協力は、あまりにも直接的で重大な干渉であつて、表面に出すことはおろか、その情報はできるかぎり隠蔽しなければならぬというのが当時の状況だつたろうからである。

前記のラングロワはやはり戦争勃発二日後にマルローがスペイン入りしたことは否定できないままに、その二四時間のスペイン訪問はあまり重要でなかつたろうと考えて、マルローのそれ以外の活動についての確実な情報を多くの資料から調べあげて、二度目の訪西と呼びうるものを重視し、その詳細を跡づけている。

筆者は最初の緊急訪西を重要視しないラングロワの考え方に賛成なわけではない。ただ紋切型となつた内戦勃発二日目の訪西についてはすべてが言いふるされておき、重複は凡庸をしか導き出さないもので、敢えてラングロワ蒐集の異なる情報を採用してみたいと思うのである。従来の紋切型の定説は、その他の情報については何も伝えてくれないが、ラングロワはその点が詳細をきわめる。

マルローは以前から美術研究のために半島を訪れたことがあり、また一九三四年のアストリアス州の叛乱と一九三六年の総選挙での人民戦線の勝利のあとは、スペインの革新の風潮に興味をいだいて、スペイン国内を旅行してまわ

り、帰国後講演をしたりしている。

ラングロワによると、スペイン内乱勃発後三日目の火曜日の夜マルローが指導者のひとりとなっていた「世界反戦反ファシズム知識人委員会」の幹部が集合し、協議の結果、マルローら数人の名で「人類全体のために英雄的に戦っているスペイン人民」に宛てて次のような長い電報を送っている。

「世界反戦反ファシズム委員会は幾百万の同調者の名において、自由と平和のために兄弟の誼みと熱にあふれた挨拶をお送りする。あなた方のすばらしい闘いは、ファシズムと戦争という不吉な勢力にたいする国際的戦い的一部分をなします。私たちは万国の幾百万の男女がわれわれと深く結ばれているのを感じています。私たちはあらゆる連盟や委員会またあらゆる友の会的組織に、精力的で効果的な連帯を表明し、野戦病院組織を結成して負傷者やその家族たちのために義捐金制度を設け、あなた方を援助するよう呼びかけをしました」

そして委員会は、通信網の混乱で連絡のとれなくなったスペインの実状調査のため、代表団を派遣することに決めた。代表団の団長にアンドレ・マルロー、その他ジャン・カスーなどが加わることになっていた。しかしこうした表だった代表団の派遣は、フランス国内の右翼勢力や列国を刺激するという考えが持ち出され、誰かひとりや四八時間に限って派遣するのが望ましい、ということになり、これにはなんといっても最も信頼のおける人物マルローを置いて他にない、と誰もが考えた。マルローとマルロー夫人は喜んでこれを引き受けた。夫人は「世界反戦反ファシズム婦人委員会」の責任者だったからである。

マルローはその二年前サバの女王の遺跡ルバ・エル・カリを探し求めて、イエーメンのセウディ砂漠の上を共に飛

行したパイロットのエドゥワール・コルニリオン＝モルニエ（のちに將軍になる）に航空省所属の飛行機一機を借りてもらい（ロッキード・オリオン）、マルロー夫妻、コルニリオン＝モルニエ、機関士のルノルマンの四名は二四日金曜日の午後ヴェルサイユ近くのヴィラクレー軍用飛行場を飛びたち、午後おそくにビアリツ近くの軍用飛行場に着陸してそこで夜を明かし、翌二五日土曜日にバルセローナを経てマドリードに着いたが、混乱した情報しか受けていないマルローたちは、着陸寸前まで、そこが共和国政府に属しているのか、すでにフランコ側に占領された敵地であるのかさえ分からなかった。

スペインの新聞「ポリティカ」紙はマルローを「世界アンチファシズムの最高峯のひとり」とし、「スペインの勇敢な戦士たちに援助を提供するために来訪中」と報じていた。共和国首脳がバラハス飛行場にマルロー機を迎えるためにさし向けた自動車には、すでに国際会議でマルローとよく識りあっていた友人のスペイン・カトリック作家ホセ・ベルガミンとバラハス飛行場長で有名な飛行家のナバロが乗っていた（前者は小説『希望』の作中人物ゲルニコ、後者は同じくヤンブラームのモデルとなる）。

ナバロはマルローに、共和国側が空軍力の不足に悩んでいることを告げた。政府軍には飛行機がないため、航空会社の旅客機ダグラスを借り入れ、定期航空路のパイロットたちを軍人に仕立てて、空けっ放したドアから爆弾を手で投げ落して、マドリードへと進撃してくる機械化部隊を爆撃させているのだった。すなわち「政府軍には一機の飛行機もひとりの操縦士もいなかった」と多くの人が伝えているのは、あながち誇張ではなかったのである。マルローはナバロにその点について詳しく質問した。ラングロワ流の考えでは、義勇軍航空隊の構想はこの時点でマルローの脳中に芽をふいたのだ、ということになるろう。

マルローは操縦桿に触れたことさえない、飛行機についてはずぶの素人である。そして軍隊の経験のない彼は、一兵卒でさえなかった。しかし彼はそのようなことにはいっさい拘泥しない。その後ただちに彼は政府軍から大佐の称号を与えられ、みずから幾度も操縦桿を握って爆撃行に向かうのである。マルローを並の人間と考えるとしばしば理解不可能に陥るのであるが、彼の行動ほど明晰性に貫かれたものもないのである。スペイン政府軍には空軍が欠如している、今飛行機を調達し、飛行士を徴集できるのは自分である、自分が空軍を組織するのであれば、人民戦線側の敗北は目に見えている、そしてそれは火急を要する、のである。

一兵卒ですらない彼は、一躍アンドル・マルロー大佐として外人航空旅団（その名もエスカドリル・エスパリーニャ、のちにアンドル・マルロー^{エスカドリル}航空部隊）の指揮官となった。（因みにその彼が、やがて第二次大戦が勃発すると、フランス軍戦車隊の一兵士として応召し、フランス破れるや、今度はベルジェ大佐と変名してレジスタンス部隊長に返り咲き、ストラスブール開放戦の指揮をとることになるのである。この場合にも、なぜならばそれが必要なこと、だからである）。マルローについてポール・ガイヤールが「即座に行動しない者は、決して行動することがない」と付言しているのは当を得ている。

なぜマルローは自分にまったく経験のない飛行機を、武器として第一に採りあげる気になったのか？ 既に述べたように、あのナバロの窮状告白が一つの直接的動機ではあるが、それだけで説明がつくようなことではない。マルローは近代戦で飛行機が果たす役割の重要性を、はやくから見抜いていた。スペインの作家ベントウラ・ガルシア・カルデロンは一九四五年一月二九日の「ヌーヴェル・リテレール」紙一九五六号に回想記を寄せ、一九三四年のこととして、カルデロンの短篇小説に夢中になっていたあるフランス軍人とカルデロンその人をマルローが自宅に招待した

とき、会話のあいだじゅう短篇小説についての話はそっちのけになり、会話はマルローとフランス大佐の戦争への技術的準備についての激論に終始し、「まるでマルローが古参飛行士のように空中戦について語るのには驚かされた」と書いている。『La Réflexion sur l'art d'André Malraux』の著者Pascal Sabourinは、マルローにとっては技術的な訓練や経験はいっこうに問題ではなくて、彼の脳中には、勝たせねばならぬという意志と、勝つための戦法以外になかったのだ、と評している。そして、マルローが飛行機の仲買人と飛行士の徴募人の役をかって出たのも同じ意図からであり、マルロー飛行隊の任務は、ヒトラーやムッソリーニによって強化されたフランコ軍を撃滅するというより、その進撃を少しでも遅らせて、政府軍が強化されるための時を稼ぎ、地上国際義勇軍が組織されるまで共和国側に持ちこたえることを得せしめるということにあったろう、と想像している。

マルローが外人部隊による航空隊を考えたのには深い思案があったに違いない、と回顧する人もいる。すなわち後の朝鮮戦争やヴェトナム戦争の経験で明らかのように、その国の飛行士が祖国の国土を爆撃し、同胞を殺傷するのはどうしても二の足を踏むものがあり、それを為し得るのは外人飛行士であるという配慮のことである。

マルロー夫妻はホテル・フロリダに入ったが、短時間にできるだけ多くを見たいと考えたマルローは、まず、大統領アサーニヤをはじめとする政府要人に会って、政府軍中枢の思惑を把握しようとした。ラングロアはここで、政府首脳たちによってマルローが飛行機の調達や外人飛行隊の組織について依頼をうけた、とはしていない。というより、首脳たちとの会談については何一つ記録していないのである。それを除く他の部分については詳細を極めながら、政府首脳との談合についてのみ記録がないのは、ラングロアの重要視していない七月二〇日（内戦勃発二日後）のマルロー最初のマドリード急訪のときに飛行隊のことがすでに談じられていたということで、その第一回訪西を無視しよ

うとするラングロアの理解の弱みが、ここに露呈されているのかもしれない。

しかしその肝心な場面を除くと、ラングロアの報告は詳細にマルローの行動を跡づけ、示唆に富んでいる。すなわちマルローの中央電話局、モンターニャ兵宮の視察などもこれで、いずれも小説『希望』に採り入れられることになるものである（前者は小説の有名な出だしのマドリード北停車場電話室の場面に利用される）。

この他マルローは、ラジオ・マドリードからフランス語による短い演説を放送し、当時フランスの大新聞がポルトガルの放送とあまり選ぶところのないデマ報道をやっている実状について述べ、自分が帰国したらフランス労働大衆にこの戦争の真実を告げるつもりだ、と結んでいる。また彼はそのあと、コルニリオン・モルニエの操縦する飛行機でマドリード周辺、および危険な状態に陥っていたトレードの上空への視察飛行を行なっている。

マルローたちは七月二六日日曜日マドリードを飛びたって、バルセローナへ向かった。そしてここで、多くの人からこのカタルーニャの首都での戦闘の模様を訊きとった。とくに識りあっていたヒラリオ・アルランデイス代議士から、やがて小説中で活写することになるカタルーニャ広場の攻撃や、コロシ・ホテルの奪取、ゴデット將軍の降状について知り得たと思われる。

七月二七日朝にパリに向けて出発するつもりだったマルローたちにマドリードから電話があり、フランスに新しく赴任させるスペイン大使アルバロ・デ・アルポルノーズを飛行機で運んでほしいという政府からの要請があった。共和政府になってからまだ正式の駐仏大使を派遣していなかったため、フランスではフォアン・デ・カルデナスがその任に当たっていたが、これが右翼系の人物だったので、政府としては更迭を急いでいたのである。

コルニリオン・モルニエはマドリードに飛行機をかえし、新フランス大使を乗せてマルロー夫妻の待つバルセロー

ナに月曜の午前中に帰ってきた。パリへと向かう飛行機のなかで、マルローは新大使にフランスで武器の調達に力を尽くすという約束をしたが、「彼はまだ、やがて自分がスペイン戦争で演ずることになる重要な役割については想像もしていなかった」というのがラングロワの見解である。しかし飛行隊組織については、マルロー自身がアメリカの新聞記者たちに、内戦勃発わずか二日後にその計画をたてたと答えている。フランスでの飛行機の調達とその買受人としての仲介については、前掲小論『総序』に記したとおりである。マルローの緒戦参加の真相は、マルロー自身の証言とラングロワの調査との合計から成るのだと思われる。なおアメリカで彼は、自分が自由にできた飛行機の数を少ないときには五機、多いときには六〇機とし、操縦士、射撃手、機関士などの人員は、最盛期には一二〇人から一四〇人を数え、そのうち六〇人ほどが戦死したと告げている（*Arrived: André Malraux, Newsweek, ix, no.10, 6 march 1937*）。

スペインからフランスに還ったマルローは、彼の帰国を待って七月三〇日「世界反戦ファシズム知識人委員会」が主催したLa Salle Wagramでの決起大会で演説し、スペインへの武器の給与と、人員の派遣の必要性を説き、満場の熱狂的な支持を得た。彼はヒトラーやムッソリーニのフランコ軍援助に口実を与えぬために、スペインへの国家的干渉は避けねばならないが、それは公的で純粹に軍事的な援助についてのみ配慮すればよいことで、公的ならざるボランティアの義勇兵の参戦を止どめるなんの理由もありはせず、とくにスペインが必要としている自動車の運転手、技師、医者、諸部門での指導者は至急送りこむ必要があり、戦車や大砲や飛行機といった武器をスペインが政府間の取引によってでなく、直接フランスなど諸国の武器製造業者から購入することができるようになければならない、と主張した。そして、Wagramの大会につづく数か月のあいだ、マルローはフランスにおけるスペイン向け武器の購入

のために力を尽くすことになる。(スペインはのために金塊をフランスに搬出していった)。

この瞬間からマルローの行動はパスカル・サプーランの言をかりるならば「地獄のリズム un rythme d'enfer」を帯びる。スペインとフランスの間を絶えまなく往復し(買いつけた飛行機を彼自身が操縦して空輸することも少なくなかった。フランスへの帰路はフランス空軍機に便乗した)、フランスで講演して宣伝活動をつづけ、編隊を指揮してフランコ軍爆撃行に飛びたつて(二度も負傷)、弾幕のなかをかいぐり、その合い間に小説『希望』を執筆(まずは断章を『ヴァンドルディ』紙に発表、やがて単行本としてガリマール社から一九三七年一月に出版)、引きつづきスペイン政府の要請にこたえて、『希望』からのシナリオをもって映画『テルエルの山脈』やまなみを戦地で製作するなど、彼は殆ど休息の時間とてなく、睡眠は四時間しかとっていなかった、とアンドレ・ジードは認めている(ジード『日記』一九三六年、九、四)。

開戦数か月にして「アンドレ・マルロー飛行旅団」は、ヒトラーがさしむけた戦闘機とムッソリーニが送りこんだ爆撃機によって、最後の一機までを失っていた。マラガの撤退作戦の援護(一九三七年春)がその最後の戦闘となった。そしてソヴィエトからの援軍機がそれにとってかわり(一九三六年十一月以降)、また国際地上義勇軍も組織されたとき(十一月)、敵の一部隊を全滅させたことさえあるマルローの飛行隊は、それまで共和国政府側に持ちこたえさせるという、当初の計画と任務を果たしていたのであった。その間に二度までもかなり大きな負傷をしたマルローは、ここで実戦から退いて、彼本来のあり方に立ちかえらうとする。

一九三七年二月二四日水曜日、商船パリ号でのマルローの渡米を、共産党系のThe Daily Worker紙、大新聞The

26 New York Herald Tribuneなどを含む幾つもの新聞が報じていた。六か月前に『侮蔑の時代』の米語訳が出版され

て六万部を売るという当たりをとったばかりのアメリカでは、スペインで飛行隊を指揮していた天翔ける文学者来たるということ、スペイン内戦に心を寄せる人々や、反ファシズムに結集する人々、また左翼の人々や一般の文学愛好者たちは、好感をもってマルローを迎えた。しかし、ドイツ共産党員を主人公とする『侮蔑の時代』の作者であり、極左的反ファシズムの闘士と見られていたマルローに、アメリカ当局は冷たかった。現に、一か月ほど前にマルローがアメリカ各地で講演旅行をするためのヴィザを申請したときも、容易にこれが交付されず、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙によると、マルローは、「合衆国政府の転覆を計らない」という約束をさせられたあと（！）、ようやくヴィザを取得することが出来たのだという（New York Herald Tribune, 25 Feb.）

マルローをアメリカ講演旅行に招待したのは、アメリカの左翼系雑誌The Nation誌のヨーロッパ派遣記者Louis Fischerとマルローの作品の翻訳を出版していたRandom Houseの副社長でマルローとは永年の友であったRobert Hausのふたりであった。前者はマルローの訪米がアメリカのアンチファシストたちを勇気づけてくれるであろうと期待し、後者はマルローが『希望』を執筆中であることを知っていたので、この小説の前宣伝に役立つことを見越してのことであった。そしてマルロー自身はこの機会にアメリカ国民のスペインへの同情を喚起し、援助物質、とくに医療用品の急送を得たいと考えていた。スペイン全土が負傷者で覆われているとき、最も恐ろしいことは麻酔薬やX線乾板の不足で、飛行士たちは戦闘での負傷よりその治療のほうを恐れていた。マルローが渡米して訴えたかったのは、何よりも先に医薬品の不足という窮情であった。

マルローはワシントン、フィラデルフィア、ケンブリッジ、ロスアンゼルス、サン・フランシスコ、トロント、モ

ントリオールなど、五週間にわたってアメリカ、カナダを講演してまわった。英語ができなかったので通訳つきという不便さだったが、それでも彼の熱弁は人々を動かした。ハリウッドを訪れたとき、マリーネ・デイトリッヒが撮影の合い間にマルローのそばにやってきた。すると人々はいっせいに彼らのまわりを取り囲んだが、それはしどけないパジャマ姿のデイトリッヒを見るためではなくて、戦火の空から舞い戻ったばかりという、精悍な空飛ぶ小説家を一目見ようとしたことだった、とピエール・ガラントは書いている。

マルローはみずから数万ドルの義捐金をアメリカから持ち還って、バレンシアに政府を避難させていたアサーニャ大統領への手土産とした。そして間もなく医薬品を積んだ救急車が続々スペインに上陸を開始したことは言うまでもない。

このころすでにマルローは、余暇など思いもよらぬ相継ぐ行動と行動の合い間に、戦地からのルポルタージュ作品『希望』の原稿を書き溜めていた。それはファシズムに蹂躪されつつある自由の危機と、共和国政府側の切迫した窮状を世界に訴えて、スペインへの同情と支持を集めようと明白に意図した、プロパガンディストに身をわりきった作品であった。ただしそのことは、フランス文学中この作品が、芸術的に群を抜く一大戦争叙事詩となることを妨げるものではなかったのである。

小説『希望』と映画『テルエルの山脈』やまなみ

小説『希望』[Espoir](一九三七)は、まず何にもまして戦争小説である。このように殊更に断るのは、別に曲筆し

ようとしてではない。たとえばこの小説とよく並び称されるヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』を、単純に戦争小説と割り切ることができないという意味あいにおいて、対証的にかく定義できるのである。ロドルフ・ラカスも『Hemingway et Malraux, Destins de l'homme』のなかで、次のように書いている。

マルローの『希望』はヘミングウェイの『鐘』とはかなり異なる平面に位置する……マルローの小説は紛うかたない戦争小説である。数多いエピソードが、地上部隊の動きや空軍の活躍といった戦闘場面を伝え、爆撃を受ける町々の描写や、隠れ場所をさがして逃げまどう群衆を彷彿させて、物語が覆う一時期の持続そのものが、われわれに一つの戦争を描きだすのであって、ヘミングウェイの小説がそうであるように、命をかけた一つの決行などを取り扱っているのではない。

その戦闘の場はまずはカタルーニャに、メリデインに、マドリードに、トレードに、テルエルにというふうに、広く戦場となったスペイン各地に及ぶ。これには、作者自身が外人航空部隊の隊長としてスペインの空を翔けめぐって爆撃行に出撃することにより、もろもろの戦野を眼下に鳥瞰することができ、また各地の飛行場に舞い降りては、さまざまな戦闘についての情報を広く集めることができたという、視野と情報域の広さが有利な条件となっている。であるから、五部、五九章にわたるこの一大戦争叙事詩には、ロバート・ジョーダンのような中心的主要人物はいないという観を呈する。いや、いないのではなくて、あまりにも数多くの个性的人物がそれぞれの場面でそれぞれ主人公として幅をきかせ（主要人物だけでも二十五名以上）、焦点がつねに広範囲に移動拡散して、作者が重きを置く主要人物はいても、彼らにおいて、虚構の向心力を一点に集める中心人物としての特権的風姿が目立ちにくいのである。し

かしそうしたなかでも、この小説のプロットが地上関係（四十一章）と空中戦あるいは航空部隊関係（十五章）という盛んに交互する二つの空間から成っているように、群像的人物構成がじつは二人の複中心人物のまわりに渦巻いていることが、自然と明らかになってくる。すなわちこの小説が、マヌエルというひとりのコミュニストによって始まり、そのマヌエルによって終わるということにも象徴されるように、冒頭、映画の録音技師出身の一義勇兵として出発しながら、戦場体験によって急速に鍛えられ、指導者としての実力を着々と備え人間的に成長して、ついには将軍となり旅団長にまでのし上がって、政府軍内に重きをなしてゆくこの重厚な人物が、地上関係の分野の中心人物であることは疑いないと見えてくる。

小説の冒頭を飾るあまりにも有名なマドリッド北停車場の電話交換室の場に、マヌエルはまず鉄道従業員組合の書記ラモスの助手として登場する。午前一時、政府はついに人民に武器を頒かつことを決定した。マヌエルらは鉄道電話で次つぎにスペイン全土の停車場を呼び出して、相手の応答によってフランコ軍の進出状態を点検してゆく。ある駅はいまだ人民戦線派が確保しており、またある駅はすでにフランコ軍に占領されている。マルローはこの巧妙な手法によって、叛乱初期の戦況の推移を浮き上がらせ、開巻後ただちに、スペイン全土の軍事的俯瞰図を見事に現出させる。こうして一方の主役マヌエルに巻を開かせた作者は、占領した町で、ベートーヴェンのシンフォニーのレコードに聴き入り、人間の運命の無限の可能性を感じとって希望に感無量となるマヌエルの姿で、この長い戦争小説を閉じるのである。

このマヌエルを地上関係場面の主要人物とするならば、空中戦闘の指揮官として、もうひとりの中心人物マニャンがいる。この国際義勇航空隊の隊長マニャンは、もちろん作者アンドレ・マルローの分身以外の何者でもない。マニ

ヤンは作者と同じくフランス人であるが、もとパイロットで定期航空路開拓者としての経歴をもつ点が、作者自身とは異なっている。小説中のクライマックスともいふべき第三編「農民」の墜落飛行士たちと農民の下山の光景は、アメリカ遊説の際にもよくマルローが演説のなかで描述してみせたというところからも、マルローの実際の体験に基づくものであり、マニヤンが観照するりんごの樹は、アンドレ・マルロー大佐その人が岩山に実際に見た果樹であったに違いない。

戦争小説である『希望』はまた、隠れもない参加の文学である。すなわち作者が決然と組するのは、あからさまに共和国側にであり、安易な死刑執行、拷問、民間人への計画的爆撃などといった残虐行為は、つねにファシスト側にありとされる。そこには世界の共感をスペイン人民政府側に惹きつけようとする、プロパガンディストとしての意図も歴然たるものがある。加えて、『希望』は革命文学としての性格をも明確にする。すなわち、ファシズムに対する闘いは、スペインの農民や貧乏人を圧迫する者たちへの闘いとなり、人民が人間の尊厳を保持して生きることを妨げるあらゆる権威（それはフランコであり、教会である）に対する闘いとしての性格を帯びる。そしてその闘いのなかでは、共和主義者、左・右の社会主義者、無政府主義者、共産主義者、あるいはカトリック信奉者、外国人など、信条を異にする人々が人民擁護のために力を合わせるのである。ただしこの革命は、開闢以来はじめて、自分たちが打ちたたてた政府を護るために叛乱軍を圧えるという、逆ばり反抗の形態をとる。

そして、ルポルタージュ文学としてマルローの作品中でも特異な形姿をみせる『希望』は、逆説的ながら、一面で思想的作品としての特徴を強くする。それは思想的立場を異にする数多くの人物たちが同じ目的のために幾多の場面で交錯し、行動を共にするため、そこに摩擦や衝突が生じることになる。とくにその人物たちが、学者、芸術家、新

聞記者、労組幹部、軍人などといった知的な人びとであるために、危機に直面して彼らが吐くつきつめた意見は、もろもろのヨーロッパ現代思想の立場を大なり小なり典型的に反映したものとなる。横塚光雄氏の「近代人の開放への希求が目ざす幾つかの思想が一卷の書物の中でこれほど明瞭に対決する場景は、いかなる文学作品の中にも恐らく見当たらない」という評は、あながち誇張ではない。しかし、さまざまな立場と意見が並行し対立するその全体を通じて流れるものは、(マルローの文学に初めて奏されるのを聞く)希望の歌である。

この小説は、内戦の勃発からマドリード攻防戦の中途まで、という市民戦争前半期を描くので、政府軍の敗北に終わる悲劇的結果はいまだ予見されていない。(神がはじめて悪人に味方したのである)。しかしそこに漲る希望とは、戦いに勝利するか否かということに左右される希望ではないのである。希望は、革命に勝利するか否かではなくて、人間がはじめて生きる理由を持つことを得、それまでのように犠牲者ではなく、みずからの運命の支配者となって、目の下の闘いの結末がどうであろうと、自分たちの理想が正しき者のそれであるが故に、あとに続く者が無限にあることに自信を持ち、男性的友愛のなかで初めて新しき人間への信頼を発見し得たということにある。マニャンが墜落飛行士たちの下山の途中に見た、あのりんごの樹のまわりにつもった果実に象徴される永遠回帰は、ニヒリスティックな不条理の作家として出発したマルローが、その文学のなかではじめて獲得した、人間の未来への期待を謳い上げる。

腐りながらも、芽生えにみちたこの果実の輪は、人間の生死を越えた大地の生死のリズムであるかのように見えた……

マルローは後年(一九四八年・六・二八)ジャーナリストのイヴ・サルグに、「スペイン戦争は、ヨーロッパの悲劇

を予告する三つの行為であったということです。つまり、ファシストにとっては小手調べの戦争であり、ソヴィエト人にとっては慎重な調査の戦争であり、共和主義者にとっては抒情的な幻影の戦争であったのです」と言い「スペイン戦争は最後のロマンチックな戦争でした」と語っているが、小説『希望』のなかで、抒情的な幻影の戦争を闘うのは無政府主義者たちであり、これに対立するのが、黙示録を組織して兵力に変貌させ、訓練により規律ある軍隊にまで持ってゆこうとする、技術重視の共産主義者たちである。

第一部第一篇「抒情的幻影」は内戦の最初の様相を描出するが、政府から銃を渡されたカタルーニアの民衆は、みずから打ちたたてた政府と、みずからの自由と人間としての尊厳を擁護するという希望にみちた衝動に駆られている。その感情的爆発は、解放と自由という幻影を求めて戦線を形づくる。それら民衆のなかにすでに、『征服者』や『人間の条件』の基調をなしていた絶対的孤独や絶望的不条理感は看られない。たとえ死を覚悟し、危険に身を投じるとしても、そこにはみずからの存在を意義あらしめる行為に殉ずるといふ、喜悦と解放感と普遍的な希望がある。

この緒戦の抒情性を醸しだす無政府主義者たちに代表される人民の前に立ち塞がっている敵は、フランコの率いる近代兵器で完全装備をした正規軍なのである。それと闘って勝利するためには、抒情的感情に秩序を与え、技術の訓練のできる組織づくりをしなければならない。しかしアナーキストのネグスは憤りをこめて吐き出す。

「コミニズムってものが宗教になったなどとは言っちゃいけない、ただ、コミニストたちが説教坊主になってきた、と言ってるだけだ。きみたちは覚ってやつにくわれちまってるんだ。党規とやらにな……おれたちは一九三四年くらい七度もストライキをやった。ソリダリテ（団結）というだけのためにな。なんら物質的な目標なしにね。」

メルスリもきっぱりと云つてのける。

「政党ってものは人間のためにできてるんだらう。政党のために人間が生まれてきたわけじゃない。おれたちは国家も欲しくないし、教会もまっぴらだし、軍隊も同様まっぴらだ。人間が大事なんだ!」。聞いているガルシア大佐は「理想主義ってものには喜劇が付き物なのかしら」と思うが、同時にメルスリのうちに何か深いもの、本格的な反ファシズムの闘争になくはならぬある何物かを感じとる。コミュニストのマヌエルはネグスに尋ねる。「このおれが僧侶にみえるかね?」。ネグスは「いや、おまえはいいやつよ。コミュニストのほうだって、いいやつはたんといる。だがどうもそれだけじゃない」。マヌエルは言う。「どのような集団的な勇気だって、飛行機や機関銃には抵抗できない。もう民兵も部隊もけっこう。欲しいのは、本物の軍隊だよ」。ヘルナンデス大尉はガルシア少佐に訊ねる。「もし革命が人間たちをよりよくしなければ、なんの意義があるでしょうか?...どうして最も人間的な人間によって、革命が行われなんでしょう?」。ガルシアは答える。「きみの言う最も人間的な人間たちは革命ってものをやらないからだよ。彼らは図書館か、でなきゃ墓場をこさえるよ」。「墓場だって、一つの模範が模範であることを妨げないでしょう」。「そんなことを言っているうちに、フランコがやってくる。...コミュニストたちは何事かを為そうとしている。それに反して、きみのような人たちはアナーキストたちは、何かであるうとしている...われわれのアポカリプスを兵力に変貌させるか、つまり、軍隊にまでもって行くか、でなければくたばっちゃうか、問題はそれなんだ...」

こうしたなかから、民衆の自衛組織が作られてゆく。これが第一部第二篇の「黙示録の実践」である。射撃操作も知らない人びとが、拳銃や小銃や自動小銃や機関銃、三七ミリ機関砲、七五ミリ山砲を手に入れてゆく。

コミュニストたちは何事かを為そうとする。それにたいしてアナーキストたちは何ものかであろうとする(第二編・第一部『あることと為すこと Etre et Faire』)。作者は小説のなかで、抒情的幻影を追う者より、戦力の組織化と

訓練を重んずるコミunistたちに目下の優位を与えてゆく。マルローのかつての作品において「何かであらう。」とした主人公たちの美しいが個人的な、人間の尊厳に殉ずることの悲壮な満足感^{ニフィカンテ}は乗り越えられて、勝つために効果を第一の原則とする現実主義が採用される。

その現実派コミunistの代表が地上部隊の主要人物マヌエルである。マヌエルはマルローによって、規律には従いつつも、許される範囲において人間的であろうとする、寛容と人間的感受性を具えた新しい革命家に仕上げられている。そのコミunistのマヌエルが精神的指導を求めるのはカトリック信奉者のヒメネス老大佐である。マヌエルは指揮者として階級を昇るにつれて、人びとから自分が離れてゆくを感じて苦しむが、そのときヒメネス大佐は教える。「真の人間の戦いは、人間が自己の一部と戦わねばならなくなったときに始まる。それまでのことは容易過ぎるのだ。そして人間はこうした戦いによってのみ初めて人間となり得るのだ」。マヌエルは革命家として成長すると同時に、人間としても、自分にさえ見知らぬ新しい人間へと変貌してゆく。自分を殺すかもしれない敵方の人間に自分のピストルを持たせて、後からついて来させるこの幅広い性格の人物は、これまでのマルローの作品には見たこともない、新しいタイプの革命家である。

小説『希望』はマドリード攻防戦たけなわの一九三七年三月頃までの描述でその巻を閉じる。

筆者は映画『テルエルの山脈 Sierra de Ternel (のちに『希望 L'Espoir』と改題)』を観たことがない。観ていない映画について述べるのは、聴いたこともない音楽について語るのに近い。であるから、映画の内容に触れることは控えるほかはない。マルローが映画がプロパガンダに資する力を痛感して、『希望』の映画化を考えたのは、遊説

のために渡米してハリウッドを訪れた時のことだろうと想像されている。しかし映画の製作を注文したのはスペイン政府で、マルローはフランコ軍の猛攻の始まっていたバルセローナでの撮影を許可され、フランス記録映画の監督をしていたボリス・ピーキヌに協力を依頼して、砲火のもとでの映画製作が始まった。マルローは小説『希望』においても映画的な手法をふんだんに用いていたのではあるが、その映画化となると、小説の夥しい場面転換と無数のエピソードのなかから、いずれを取捨選択すべきかに途方に暮れたであろうと思われる。まったく新たなシナリオを書きおろすべきか、もしくは、小説中の際だった幾つかのエピソードを選びだして、それらを重点的に取り扱うか？…

『André Malraux und der Film』（一九七三）の著者フランツ・ヨーゼフ・アルバースマイヤーは、マルローが折衷的な方法を採用し、主たる源泉として小説から出発することに決めつつも、小説中では萌芽の状態でしかなかった幾つかのエピソードを、発展させ拡大する方法をとった、ということを考証的に証明している（Joseph Turt: Malraux et le cinéma）。このようにして、マニャン（航空関係）とマヌエル（地上関係）の周辺に分配されていた六六名にものぼる人物たちは、映画では一七名に絞られていた。

映画のクライマックスは、やはり墜落飛行士たちの担架と農民たちの下山のシーンだった。しかしこの場面には、山道を降りてくる農民の行列という莫大な人数のエキストラが必要で、これは軍隊の応援に頼らざるを得なかったが、この最後のシーンは観る人びとに忘れ得ぬ感動を与えたといわれる。

映画は一九三八年の春から冬にかけて不完備なスタジオ、絶えまない停電と空襲警報あい継ぐなかで製作され、陥落したバルセローナにフランコ軍が入城する二日前に撮影を完了し、第二次大戦勃発前夜にパリで編集を終えた。しかし人民戦線政府が崩壊してダラディエ内閣の世となったフランスで、スペイン人民戦線の戦いを題材とするこの映

36 画は上映禁止となった。一九三九年夏開戦直前に、シャンゼリゼ座において一回だけ非公開での試写会が行なわれた

が、フィルムは幸運にもナチス・フランス占領軍の手を逃れ、一九四五年に初めて商業ルートにのせられることになり、Louis-Delluc賞を授与されて、イタリア・リアリズム映画の先駆をなすものと見做された、と言われている。

あとがき

スペイン戦争がマルローの人生の転回点を画したように、小説『希望』は彼の作品群にとっての分水嶺をなす。

「死」に取り憑かれ、すべてのキャラクターを時という癩に蝕まれてきたかつての不条理の作家は、『希望』にいたってその不安と孤独の相貌に変容をきたす。『希望』においては、それこそ死が戦野のいたるところに現存するのだが、いまや死は小説を支配するドミナントではなくなってくる。『人間の条件』の最後の場面で垣間見られた男性的な同志愛と連帯の感覚、人間の尊厳を護るための反抗、死を恐れぬ行動、などという代置の価値が、いまや代理としてではなく主役として、死と入れかわって前面に押し出され、小説を支配し活性化する高貴な想念となる。

マルローは当初から、いまだ敷かれていない未知の、彼独自の道ばかりを選びとってきた。スペイン戦争に臨んでも、彼が選んだのがどれほど未踏の斬新な道であったかは、本稿で見たとおりである。

『希望』には、マヌエルというキャラクターをもって、新しい革命家のイメージが現出されていた。しかし、いまスペインを去って行くマルローは、いつまでもそのイメージに固着して、コミニズムとともに留まろうとしたりはしない。スペイン戦争さなかにあって、すでに彼はスターリンの本性を見破っていた。スターリンが護ろうとしたのは、

人民戦線政府でも、スペイン人民の自由でもなかった。それは対ファシズム戦略としての小手調べ的干渉であり、そのためのスペイン共産党支援であったのにすぎない。やがてスターリンがヒトラーと奇怪な条約を結んで、小国を犠牲にし、インターナショナルの灯を吹き消したとき、マルローは十九世紀の夢がすべて潰えたことを悟り、ようやく、そして決然と、祖国フランスの上にヨーロッパを築き直す以外にないという決意を固める。祖国を蔑ろにすることは、かつてそうであったように、より多くの人間性を求めることにはならなくて、たんにロシア人になろうとすることには帰着しない。極東からナチス・ドイツに、そしてそのあと内乱のスペインにと大迂回をしたのち、ようやくマルローはフランスに帰るのである。

マルローは共産主義がまだ孤立という不安のなかで凍え、ヨーロッパ各国の労働者や知識人たちの共感によって温められる必要のあった時期に、コミニズムの側へと身を寄せたが、それがいまや充分に強大となり、世界にスターリニズムの不吉な影を伸ばしはじめたときに、それを離れる。しかしそのあとマルローは、やはりまだ敷かれていない、未設の道に踏み出して行く以外にない。彼自身にもみずからがどのように生成するのかが解っていない。一九三九年第二次世界大戦が勃発するや、彼はまず一兵卒として参戦し、国破れるや、やがて一、五〇〇人のマキ抗独者の指揮官となり、ベルジェ大佐にみずからを昇格させて、アルザス・ローレヌ旅団を指揮してストラスブール開放戦を戦い、戦後はド・ゴール内閣の文化相、そして美術評論家にと変身する。はやくも彼の目にとって、ヒトラー無きあの最大の危険はスターリンとなるが、この転進はフランスにおけるコミニズムの退潮を先取りする。そしてフランスの上にこそヨーロッパを復興する以外にないと考える彼は、フランスの栄光を取り戻そうとするド・ゴールという権力に味方して、その奇抜大胆な変節ぶり、またもや世界の人々を唾然たらしめるのである。

参考文献

- Biet, Brighelli, Rispail : *Malraux, la création d'un destin*, Gallimard, 1987.
- Mage, Tristan : *André Malraux, un écrivain singulier*, Paris, Chez l'auteur, 1986.
- Boisdeftre, Pierre de : *Malraux*, Éditions Universitaires, 1963.
- Picon, Gaëtan : *André Malraux*, Gallimard, 1945.
- Picon, Gaëtan : *Malraux par lui-même*, Seuil, 1953
- Moatti, Christiane : *Le prédicateur et ses masques*, Publications de la Sorbonne, 1987.
- Arland, Marcel : *Essais et nouveaux essais critiques*, (p.271 à p.280 *André Malraux et L'Espoir*), Gallimard, 1952.
- Langlois, Walter G. : La Revue des Lettres Modernes, (p.93 à p.133, p.159 à p.161, *André Malraux 2, visage du romancier*), Lettres Modernes Minaud, 1973.
- Langlois, Walter G. : La Revue des Lettres Modernes, (p.55 à p.72, p.105 à p.115, *André Malraux 4, Malraux et l'art*), Lettres Modernes Minaud, 1978.
- Langlois, Walter G. : La Revue des Lettres Modernes, (p.93 à p.114, *André Malraux 5, Malraux et l'Histoire*), Lettres Modernes Minaud, 1982.

Chantal, Susanne : *Le Coeur battant. Josette Clotis et André Malraux*, Bernard Grasset, 1976.

Hebert, François : *Triptique be la mort, une lecture des romans de Malraux*, Bibliothèque Nationale du Quebec, Les presses de l'Université de Montréal, 1978.

Sabourin, Pascal : *La Reflexion sur l'art d'André Malraux, origines et évolutions*, Editions Klincksieck, 1972.

Pierre Broué et Emile Témime : *La Révolution et la Guerre d'Espagne*, les Editions de Minuit, 1961.

ピエール・ガランツ、斎藤正直訳「『小説的生涯』アンドレ・マルロー」早川書房、一九八三年

横塚光雄「『アンドレ・マルロー』」紀伊國屋書店、一九七三年

横塚光雄「『アンドレ・マルロー』自我の革命」審美社、一九八〇年